

松島蘇順泉



校長室の廊下に掲げられている田中正造翁肖像画の作者松島蘇順泉について紹介します。

松島蘇順泉(まつしま そじゅんせん)

本名 松島 順

松島蘇順泉は、明治32年10月18日、埼玉県北埼玉郡原道村弥兵衛の代々医を業とする松島家に長男として生まれた。本名を順という。

蘇順泉は、原道尋常高等小学校、埼玉師範学校附属小学校、埼玉県立粕壁中学校を卒業し、大正6年に東京慈恵会医学専門学校に入学した。小学校時代の同級生に埼玉県知事を務めた栗原浩がいる。

大正8年、本科一年に進学した蘇順泉は、葵橋洋画研究所に入り黒田清輝の教えを受けたほか、辻永に作品を見てもらった。この頃、二年先輩の吉田忍、一年先輩の鈴木良三と三人で洋画研究会の「腕土魔社」を結成し、毎年学校の講堂で美術展覧会を開催した。

大正10年春、画壇の新しい登龍門であった中央美術展の第二回展が開かれ、蘇順泉の「裸木の陽」が入選した。これが公募展への初入選である。

大正12年3月東京慈恵会医学専門学校を卒業して、同大学附属病院外科助手となる。同年9月に関東大震災に遭い、宮内省巡回救療班医員として下町方面で救護に活躍した。また、その翌年には第5回新光洋画展、第12回光風会展に入選している。その後、栃木県下都賀郡藤岡町の大塚つる子と結婚し、上十条に医院兼画室を建てて住んだ。

その後、医業を継ぐために故郷の利根河畔に帰った。故郷で父と開業医生活を始めた蘇順泉は、当時、埼玉県下では珍しかったインディアンという真っ赤なオートバイに乗って往診した。その頃の医師はほとんどが人力車で患者の家を回っていたので、このオートバイは評判となった。また、利根川にボートを浮かべ、栗橋町や藤岡町に出張診療所を設けた。

昭和4年7月に父を失った。この年の第10回帝展に「秋立つ頃」が初入選し、新聞記者が利根河畔の蘇順泉の画室に取材しに来た。翌年も帝展に「曇り日」が入選し、新鋭画家として美術雑誌の批評にもしばしば取り上げられている。

その後は帝展への出品をやめ、昭和8年の第20回二科展に「名残の花」を出品して入選以来、亡くなるまで二科作家として活躍した。

昭和13年から22年までは軍医として、中国の広東、海南島、汕頭、ハルビン、ビルマのラングーンなどの戦地で軍務に就いた。地獄の戦場といわれたビルマでは文字通りの九死に一生を得て、奇跡的に再び故郷の土を踏むことができた。

戦後は毎年二科展に異風の大作を出品して、その新鮮な画境を高く評価された。そうした制作はほとんど利根河畔の生地から離れずになされたもので、河畔の隠者のような趣さえあった。

蘇順泉の作品は、晩年制作のものが最も多い。しかも、年を重ねるごとに独自の画境が深化し、利根河畔の水郷情緒を愛したその風景画は油彩で描いた水墨画の感がある。そこまで風土を描き切った画人は稀であろう。

かつて蘇順泉はこう述べた。「私は根っからの利根河畔人である。暑い、寒いにつけ、土に起き、水にもぐって育ってきた。パリの画家は、壁によって立派な作品を残した。私の感激は、土にはじまり、空の彼方に向かっている。太陽あり、農夫あり、牛あり、生きていくものの真剣さが、四季の歌を響かせると信じている」その絵画精神が晩年の作品の一点一点にちりばめられている。

参考：さいたまの洋画人 松島光秋

肖像画の左下には「昭和5年 松島 順」と記されています。松島画伯は、どんな思いで田中正造翁を描いたのか・・・ 想像の翼が広がります。来校の際は、ぜひこの肖像画をゆっくりとご覧になってください。